HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研究環境を考えるワークショップ WHAT IS IMCTS？
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 15, 1-11
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/83059
Type	bulletin (other)
File Information	Sauvage15.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究環境を考えるワークショップ
WHAT　IS　IMCTS？

■ワークショップ開催の背景

①国際広報メディア専攻×観光創造専攻の研究交流の減少と学院改組

大学院が設立されて 20 年が経過し、学院が提供する研究会や演習等のプログラムが充実する反面、学生による自主的な勉強会や、各自の専門分野を超えた研究交流の機会が減少している。その結果として、学位を取得して就職を目指す人と博士進学を目指す人の二極化、あるいは実践系と理論系の二極化が加速しているように思われる。

学院内交流と二極化が進む裏で、2019 年 4 月から国際広報メディア、観光創造の両専攻が一本化されることが決定した。現状では、両専攻ごとに研究室が異なり、合宿等のイベントもそれぞれで開催されている。加えて、留学生と日本人学生が交流する場面も少なくなってきている。大学院の特性上、元々留学生が多い組織であることは確かだが、留学生と日本人学生、それぞれがそれぞれのコミュニティを醸成していることは否めない。学院側としても、特に研究室の配置については、具体的な案も決まっていない段階であったため、現役学生側の意見を聞きたいという要望があった。

②2018 年 9 月 6 日の北海道地震時の対応

9 月 6 日の北海道地震発生後、複数の学生が、学院側から学生に対して何のリアクションもないことに疑問を感じたようである。大学の他部局では、SNS 等を通じで断続的な情報発信がされていた一方で、本大学院は「メディア」と冠する大学院にも関わらず、そのような情報ツールや発信する仕組みもなかった。当学院は北大の中でもいち早く大学内外をつなぐ役割を担わなければならないはずではないかと、提言する学生が現れた。

■ワークショップの目的

○ ワークショップを通じて学生、教員両者が大学院への考えや思いを共有し、それらを可視化すること。それぞれが大学院のことをどう考え、実践しているのかを意見交換する。

○ 学院内で新しいグランドデザインに基づいた研究交流の契機を生み出すこと。本学院では多種多様な研究会が開催されており、フィールドでの演習も数多く用意されているが、学院内において（講演や発表会等とは異なる形式としての）ワークショップのような場の開催実績は少ない。

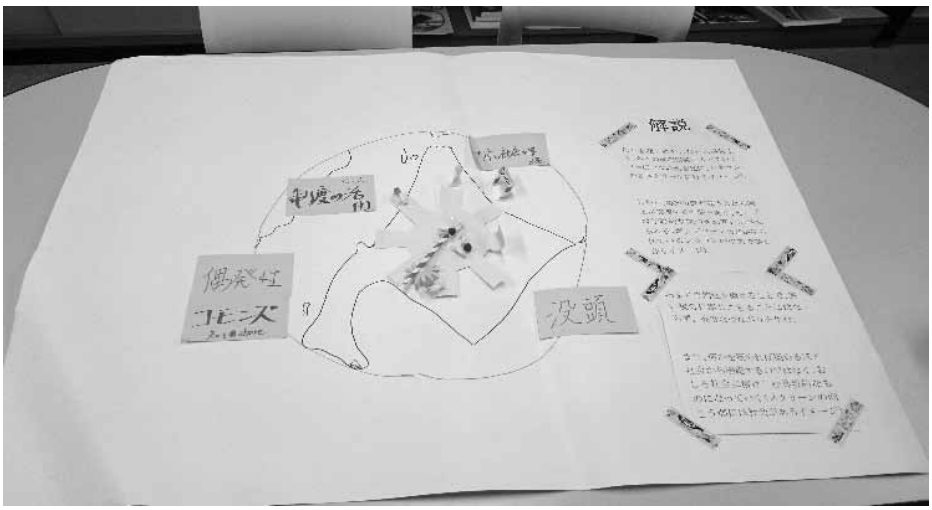
○ 研究環境の改善案を提案すること。本大学院のハード面の特徴として、学生個人の机が用意され、研究環境に集中できるという特徴があるが、その反面、それが相互の研究交流機会を生みだしにくい状況を作り出しているとも考えられる。今回のワークショップで、研究環境の改善点を取りまとめ、学院側に提出する。

■ワークショップの実施内容

〇第 1 回　11/24(土)13：00～17:00@メディア棟 608 教室)

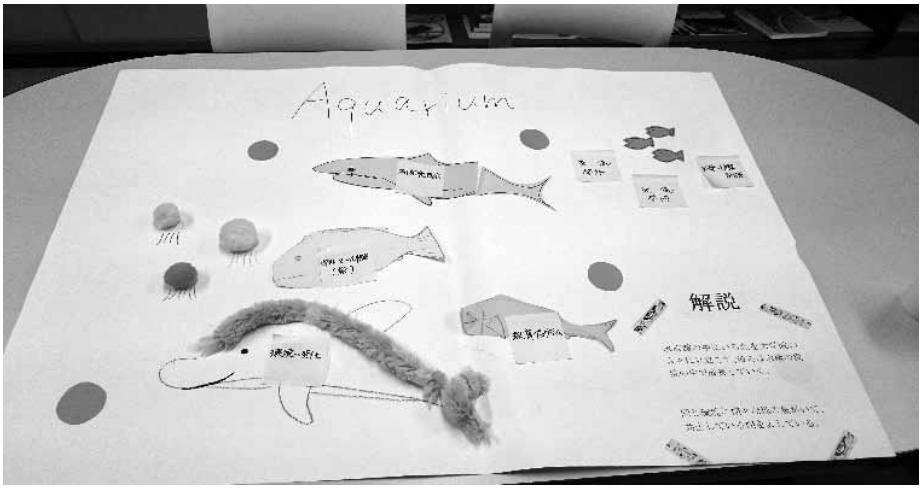
まず「外」の大学や研究環境を知るという趣旨のもと、依田真美氏（観光創造専攻博士修了生）より、国内外のオープンな研究環境やオフィスの事例をご報告いただいた。ワークショップでは 3 チーム（学生・教員混合）それぞれが「自らにとっての最高の大学院生活」について対話を深め、それをグラフィックにする作業を実施した。

チーム①「シネコン（シネマコンプレックス)」



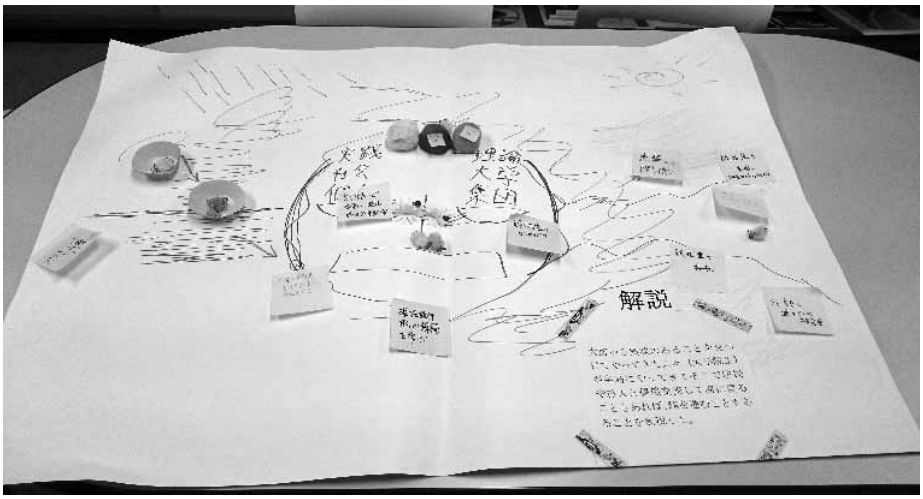
解説：「何かを深く研究したい人が集まり、各々の専門領域に入っていく（＝好きな映画を見に、シネコンの各スクリーンに行くイメージ)。しかし、専門分野が違う人たち同士が交流する空間があり、そこでは学際的な気づきお互いに与えられるスペースもある（シネコンの中央で話し合うイメージ)。

チーム②「Aquarium」



解説：「水族館の中にいる魚を大学院の人々に見立てて、彼らは水槽の環境の中で成長していく。同じ環境に様々な種の魚がいて、共生している様を表している」

チーム③



解説：「大海から興味のあることを見つけてやってきた人々（大学院生）が半島にやってきてそこで住民や旅人と偶然交流して海に戻ることもあれば、陸を進むこともあることを表現した」

結果と考察

ワークショップ前のコアメンバー会議では、相互交流には否定的とは言わないが、前向きな意見はあまり聞かれなかった。主な要因としては、2つ考えられる。第一に、IMCTS の研究棟自体が、個人の研究環境を優先する構造となっていること(それ自体は IMCTS の研究環境の価値でもある)。第二に、2000 年に大学院が設立されて、組織や仕組みが成熟してきたため、研究室や専攻単位でのプログラムが増加し、相互のつながりが薄れてきたことに起因すると考えられる。

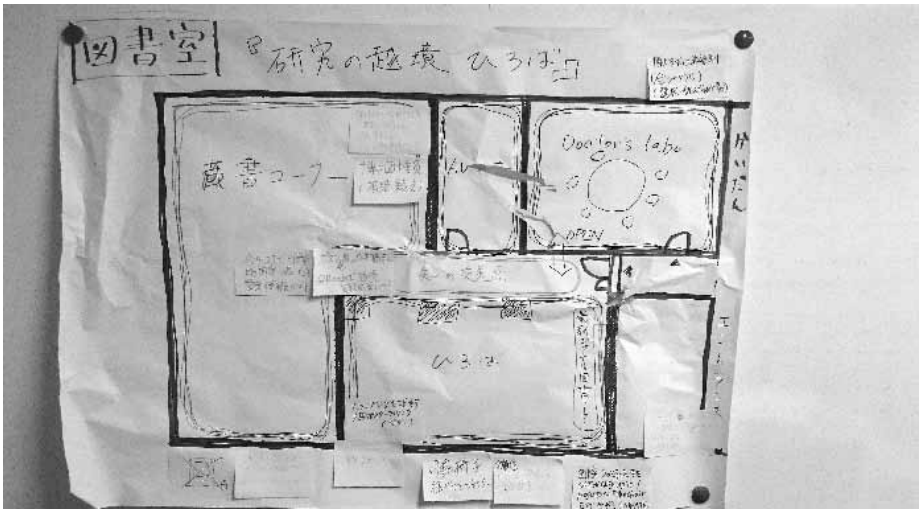
上記の背景からワークショップでも、開かれた研究環境に対する拒否反応が強かった。教員からは新しい学院体制やカリキュラム、そして「観光メディア人材」を育成することが語られたが、そもそもそれを体現している人材が当学院にいないことが露わになったように思う。その流れから、依田氏がイノベーションを創発するような海外オープンラボについて説明をしても、「新自由主義的な潮流」、「個人の静かな研究環境を維持したい」との意見が多かったのではないか。

一方で、ワークショップ「あなたが考える最高の大学院生活とは？」は非常に盛況であった。このことから、個人の研究環境は重視しつつも、学院内の他者とつながる経路自体は閉じるべきではなく、研究や大学院生活を通じた交流ができる余地が必要であると考えられる。

○第 2 回（12/22(土)13：00～17:00@メディア棟 105 教室）

大学外における「まちば」での相互交流の事例として、四戸秀和氏より、松山アーバンデザインセンターでの実践についてご報告いただいた。ワークショップでは「みんなが快適に過ごせる研究環境を考えよう」をテーマに、学生が日常的に使用する「研究室・談話室」、「演習室」、「図書室」の 3 チームに分かれ、現状の研究環境を、実際の現場を歩きながら検証し、改善点を提案した。「図書室」については次回ワークショップの土台となる案が出された。

図書室チーム「研究の越境ひろば」



図書室を「蔵書コーナー」、「AV ルーム（現状維持）」、「ひろば」「Doctor’s Labo」「知の交差点」の 5 つの機能を持たせ、専攻・学年、教員・学生、日本人・留学生を越境した研究交流が生まれる場とする。

「蔵書コーナー」：国メ・観光の図書を集約。短期支援員で博士学生が在中。

「ひろば」：学会発表の練習や研究発表会をする場

「Doctor’s Labo」：フリーアドレス制の博士課程の部屋

「知の交差点」：学内向けの告知掲示板を集約

結果と考察

ゲストスピーカーの四戸氏は、大学時代のオープンな研究環境が自らの研究の土台となり、それが現在の松山アーバンデザインセンターにおける

まちなかでの相互交流を生む仕掛けづくりにも役立っていると報告した。

ワークショップでは「研究室・談話室」、「演習室」「図書室」チームに分かれ、研究環境の改善点を提案した。その中で前者 2 つは特に大きな変更点はなく、図書室をオープンラボ的な研究環境にすることで話がまとまった。これまでのワークショップでは、現役の学生が個人の研究環境が重視していることが分かった。したがった、まずは、学院の正面入り口に面し、専攻を越えた共有スペースである図書室を試行的にオープンな研究環境とすることは妥当であると思われる。

○第 3 回（12/22(土)13：00～17:00@メディア棟 105 教室）

ワークショップ全体を振り返りながら、ゲストにビジュアルファシリテーター和田あすみ氏を迎え、「新たな学び・研究の場を、ともに描く～ビジュアルファシリテーションの事例より～」について考え・実践した。また、ワークショップの成果として学院に提出するための「図書室環境改善案」（研究の越境ひろば）を具体化した。

研究の越境ひろばについての案

○蔵書コーナー：現在分かれている国際広報メディア・観光創造両専攻の蔵書を一つに集約。RA として学生が常駐し図書の管理などを行う

○ひろば：個人作業はもちろんのこと、研究発表会、ゼミ、打合せなど、各専門、各専攻が交流できるような場所とする。誰でもいつでも入れるような空間に。プロジェクター、プリンター、プロッターなどのアウトプット設備も完備。

○知の交差点：研究関連情報を掲示するコーナー。壁面に各研究室のゼミ開催予定やセミナー、学会情報などの情報が掲示されている。研究内容のポスター掲示をしてコメント受付なども可能。

○Doctor’s LABO：札幌圏外から通う人など個人デスクの不要な博士課程在籍者向けの作業スペース。教員や修士課程在籍者も自由に出入りできるようになっている。　など

結果と考察

冒頭でワークショップのこれまでの経緯を説明した後、前回ワークショップでゲストスピーカーを務めて頂いた四戸さん作成の図面を基に、図書室の環境改善案について、具体的な意見を出し合った。「研究の越境ひろば」と題した図面には、現状の IMCTS の研究環境としての改善点やメリットをさらに伸ばすための意見が集約された。また、ゲストスピーカーの和田あずみさんによるミニワークシップでは参加者全員が手を動かし、絵を描いた。

「WHAT IS IMCTS？」のビジュアル化

ビジュアルファシリテーター和田あすみ氏作

■コアメンバーの感想

山崎翔（観光創造専攻博士課程）

研究者が行動すること」。そのことを第一に考えてスタートしたワークショップ。その行動に伴うワークショップの枠組みや目的が不明瞭な部分があり、メンバーには多大なる負担や労力をかけてしまった。それをまずは反省したい。でも、自分の身体を使って、誰かに出会い、訴えかけること。その行為自体が人を動かすことにつながることもある。それが少しでも伝わっていたら嬉しいです。ワークショップに関わってくれた全ての皆様に感謝します。IMCTS 大好きです。

杉江聡子（メディア・コミュニケーション研究院助教授）

一連のワークショップを通して、人が集まり、対話が生まれ、交流が深まる場づくりには、やはり「空間」と「プログラム」と、何より「人」が不可欠であると再認識した。全体を通じて観光創造専攻の院生が主体的に参加しており、やはり国メとの壁は残ったが、直接声をかけた留学生が友人を誘って参加してくれたりしたことは喜ばしく、普段からの関係づくり、それができる余白が重要だと感じた。今後、学院の構成員は更に多様化するだろう。異文化を背景とする人々との多文化共生社会の進展に先駆けて、そのような小さなコミュニティを体現している本学院で、対話と交流を通じた新たな価値共創の機会を増やしていきたい。

渡邉謙仁（国際広報メディア専攻博士課程）

最後まで目的が明確にならなかったワークショップだったが、皆が気持ちよく使える図書室の改装案を創出できたのはよかったと思う。今後は「楽しかった」ワークショップを一時の祭りに終わらせず、その成果を今後の研究交流に生かしていけるかが課題となろう。私はよく外部の研究会に皆が演習室で遠隔参加できるようにしているので、それらにも積極的に参加してほしい。

渡辺萌木（観光創造専攻修士課程）

「建築デザイン」を学んだ経験が活かせるとお声かけいただき、なんとなく参加したワークショップでした。企画を進めていくうちに、学院の持つ空間・設備のポテンシャルがどんどん発掘されて、「もっと早くこの WS やりたかった！」と思いました。学院の構成員が変われば、考え方も変わってくると思うので後輩たちにも、是非、定期的にこのような事を考える機会を作り、学院の設備をうまく使い尽くして欲しいです！楽しかったです、ありがとうございました！

唐崎翔太（観光創造専攻修士課程）

自分は来年からこの大学院を去る身なので、「OB・OG が帰ってきたくなる大学院」になればよいと思いワークショップに参加していた。今回ワークショップで学院のハードとしての可能性を見出すことができたが、一方で「なぜ 2 つの専攻が交流する必要があるのか」という問については、まだまだ議論の余地があると思う。来年度以降も学院に残る方々には、定期的にこの問を皆で考える場を設けてほしい。